

滋賀県平和祈念館 年報

第1号

(平成23, 24年度)



滋賀県平和祈念館

はじめに

滋賀県平和祈念館は、県民の戦争体験を語り継ぎ、平和を願う心を育む施設として、平成24年（2012年）3月17日に開館しました。当館では、「モノと記憶の継承」、「自らできることのきっかけづくり」、「県民参加型の運営」の3つを基本理念としており、この基本理念に沿って様々な活動を実施してきたところですが、このたび、年報というかたちで、開館から平成24年度までに実施した事業の実施報告をさせていただくこととなりました。

当館は、開館して間もないこともあり、現在も試行錯誤を続けながら運営を進めているところです。したがって、現状はまだまだ完成されたものではありません。これからも日々、館の運営を見直し、改善を行ってまいりたいと考えております。本誌をご高覧いただいた皆様におかれましても、忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

今後とも当館の運営にご理解、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

平成25年（2013年）12月

滋賀県平和祈念館

館長 端 信 行

目 次

はじめに	1
I 事業概要	
1 展示事業	
(1) 企画展示	3
(2) 特別企画展示	18
(3) 地域交流展示	19
(4) 他館との交流展示	22
(5) その他の展示	24
2 資料収集保存事業	
(1) 戦争体験聞き取り調査	25
(2) 収蔵資料の整理・保存	26
3 普及啓発事業	
(1) 開館記念講演会	27
(2) 平和学習講座	27
(3) 館長講座「自分史づくり講座」	28
(4) 戦争遺跡見学フィールドワーク	28
(5) 戦争体験者お話し会	29
(6) 学童保育所への夏季平和学習プログラム	30
(7) へいわの学校☆あかり	31
(8) こども体験学校「アロマキャンドルづくり」	31
(9) 平和のあかりコンサート&ナイトミュージアム	32
(10) ピースメッセージコンクール	33
(11) 開館1周年記念イベント「平和祈念のつどい」	34
(12) その他一般向けの普及啓発事業	36
4 平和学習支援事業	
(1) 来館学習の支援	37
(2) 出前授業	38
(3) 資料貸出	39
(4) 活用の手引き・実践事例集の発行	40
5 ボランティア活動支援事業	41
II 資料	
1 利用状況	43
2 広報活動	47
3 組織	50
4 決算	51
5 施設概要	52
6 利用案内	53
7 関係規程	54

I 事業概要

1 展示事業

(1) 企画展示

第1回企画展示 「滋賀の戦争」



第1回企画展示

会期：平成24年（2012年）3月17日～7月16日

会場：滋賀県平和祈念館企画展示スペース

関連展示：「慰問袋」「軍装品」「代用品」

開催趣旨と概要

本企画展示「滋賀の戦争」は、これまで収集してきた県民の戦争体験とそれにまつわる当時の資料の中から、「八日市飛行場」「集団学童疎開」「戦時の暮らし」「県民の戦場」「満州・シベリア抑留」「学徒勤労動員」「滋賀県の空襲」の7つのテーマを取り上げ、人びとはどのような経験をされ、何を感じていたのか、また、滋賀においてどのような生活が営まれていたのかを、戦争体験談を通して、滋賀県が経験した戦時の出来事を紹介するものである。



開館告知チラシ表面



開館告知チラシ裏面

展示構成

「八日市飛行場 ―飛行場があった街―

大正4年(1915年)、八日市に日本初の民間飛行場が建設され、その後陸軍の飛行場となり、戦争中は、多くの部隊が戦地へと向かった。戦争末期には、飛行場に対して空襲がたびたびあり、飛行場の周りで暮らす人たちは、空襲におびえる日々を過ごさなければならなかった。



「集団学童疎開 ―戦火を逃れてやって来た子どもたち―

昭和19年(1944年)8月31日から9月2日にかけて、大阪市内の東区、南区(ともに現在の中央区)、浪速区、北区から、今の小学校3年生から6年生にあたる子どもたち1万人以上が、滋賀県にやってきた。子どもたちは、家族と離れて寂しい思いの中、集団生活をおくっていた。終戦を迎え、大阪へ帰れたのは昭和20年(1945年)10月ごろだったが、待っていたのは空襲で焼けてしまった大阪であった。



「戦時の暮らし」

日々の生活では、金属や食糧の「供出」や、戦地に行く兵士の見送り、空襲に備えた防空演習、本土決戦に備えた訓練などが行われ、戦争の影響を受け、変化していった。こうした戦争を支える地域や人びとは「銃後」とよばれ、その中心は女性たちだった。



「県民の戦場 ー死が目の前にー」

長い戦争の間に多くの人が戦争に行き、約 630 万人が全国から召集され、滋賀県からは約 95,400 人の人たちが日本軍の軍人として戦い、32,592 人の滋賀県出身者が犠牲となった。戦場となった東アジアや東南アジアでは約 2,000 万人もの兵士や一般市民が犠牲になったといわれている。



「満州国・シベリア抑留 ーふるさとを遠く離れてー」

昭和 6 年(1931 年)、中国東北部で起こった満州事変以後「満州国」が建国され、国策により多くの人に移住した。しかし、満州で終戦を迎えた人は、悲惨な状態におかれ、混乱のなかで亡くなった人たちも少なくない。また、ソ連軍の捕虜としてシベリアなどに連行された人たちも多く、空腹と厳しい環境のなかで多くの人亡くなった。



「学徒勤労働員 ー勉強よりも増産ー」

戦争が長引くとともに労働力が不足し、生徒も授業の合間に働き手として動員され、内湖干拓作業や、軍需工場などで働かなければならなかった。昭和 20 年(1945 年)には、国民学校高等科の子どもたちまでもが、働くために動員されるようになった。



「滋賀県の空襲」

滋賀県では、昭和20年(1945年)5月から空襲が始まり、次第に軍事施設や軍需工場、駅などを中心に空襲の頻度が多くなっていった。また、琵琶湖は本州各地の空襲の目的地に向かう際の目印になっていたため、たびたび空襲警報が発令され、県民はそのたびに防空壕や安全な場所に避難しなければならなかった。



関連展示

企画展示テーマに関連し、収蔵展示スペースにおいて、離れなければならなかった家族や知人への想いについて「慰問袋」、出征した兵士について「軍装品」、そして日常生活が戦争の影響で変化したことについて「代用品」の3つの視点より、収蔵資料を紹介した。



収蔵展示



「慰問袋」



「軍装品」



「代用品」

第2回企画展示 「家族の絆 ー県民の戦場ー」



第2回企画展示

会期：平成24年（2012年）7月20日～9月23日

会場：滋賀県平和祈念館企画展示スペース

関連展示：「子どものおもちや」

開催趣旨と概要

本企画展示「県民の戦場」は、3名の体験談に焦点をあて、手紙や資料などから失われなかった家族の絆を通じて、平和について考える場の形成を目指すものとする。身近な地域でも、多くの方が戦争で亡くなっていること、戦争で苦しんだ人がいることを知るために、現在では行われていない「召集・応召」「村葬」とともに、当時の暮らしを紹介し、子どもたちが夏休みの平和学習で活用できる環境づくりも行った。



第二回企画展示チラシ表面

展示構成

「召集・応召 ー戦争に行くということー」

終戦までほとんどの男性は、20歳になると、徴兵検査を受けなければならなかった。

徴兵検査に合格すると召集令状が届き、応召して入隊した。応召はとても名誉なこととされ、家族や地域の人たちがにぎやかに見送っていたため、家族との別れに涙を見せることや、無事を祈るような気持ちを出すことはできなかった。



「県民の戦場 ―死が目の前に―」

滋賀県からは約 95,400 人の人たちが日本軍の兵士として戦い、32,592 人の滋賀県出身者が犠牲となった。ここでは、海軍特攻隊員として戦死された碓本守さん、衛生兵として 3 度の召集を受け、戦死された青木勘四郎さん、学徒出陣として早稲田大学在学中に出征された熊谷直孝さんの体験を紹介する。



「合同葬・村葬 ―無言の帰還―」

亡くなった兵士の葬儀は、故人への感謝とご遺族へのいたわりの心を込め、村などが主催の合同葬として、学校の講堂や公民館などで盛大に行われた。亡くなった兵士は「名誉の戦死」とされ、残された家族は悲しみを抑えて万歳で迎えなければならなかった。その後、終戦が近づくにつれ、葬儀は簡素化されていった。



「集団学童疎開 ―戦火を逃れてやって来た子どもたち―」

昭和 19 年 (1944 年) 8 月 31 日から 9 月 2 日にかけて、大阪市内の東区、南区 (とも

に現在の中央区)、浪速区、北区から、今の小学校3年生からから6年生にあたる子どもたち1万人以上が、滋賀県にやってきた。子どもたちは、家族と離れて寂しい思いの中、集団生活をおくっていた。終戦を迎え、大阪へ帰れたのは昭和20年(1945年)10月ごろだったが、待っていたのは空襲で焼けてしまった大阪であった。



「戦時の暮らし」

日々の生活では、金属や食糧の「供出」や、戦地に行く兵士の見送り、空襲に備えた防空演習、本土決戦に備えた訓練などが行われ、戦争の影響を受け、変化していった。こうした戦争を支える地域や人びとは「銃後」とよばれ、その中心は女性たちだった。



「滋賀県の空襲」

滋賀県では、昭和20年(1945年)5月から空襲が始まり、次第に軍事施設や軍需工場、駅などを中心に空襲の頻度が多くなっていった。また、琵琶湖は本州各地の空襲の目的地に向かう際の目印になっていたため、たびたび空襲警報が発令され、県民はそのたびに防空壕や安全な場所に避難しなければならなかった。



関連展示

企画展示内の「戦時の暮らし」に関連し、現在の子どもたちが自分の日常と比較しや

すくするための工夫として、収蔵展示スペースにおいて、戦時中の子どもたちの身近にあった「おもちゃ」「お菓子のパッケージ」「紙芝居」の3つのカテゴリーより、収蔵資料を紹介した。



第3回企画展示 「八日市飛行場 —飛行場があった街—」



第3回企画展示

会期：平成24年（2012年）9月28日～12月22日

会場：滋賀県平和祈念館企画展示スペース

関連展示：「子どものおもちゃ」→前回企画展より継続

開催趣旨と概要

本企画展示「八日市飛行場 —飛行場があった街—」は、八日市飛行場と、飛行場とともに発展してきた八日市を中心とする東近江をテーマに、地域に残る戦争の記憶を資料と体験談からたどる。また、8月に一般の方より募集をした、八日市飛行場に関連する資料を同時に展示することで、館運営の理念のひとつでもある「県民参加型の運営」への取り組み事例とした。



第3回企画展示チラシ表面



第3回企画展示チラシ裏面

展示構成

「陸軍八日市飛行場」

八日市飛行場は、日本で初めての民間飛行場である「沖野ヶ原飛行場」を前身として

いる。その後、陸軍に航空大隊が編成され、地元の陸軍飛行場誘致活動もあり、航空第三大隊が八日市へ配属されることになり、航空第三大隊の開隊とともに名称も「八日市飛行場」へと改められた。飛行場での出来事を、整備等を行っていた航空分廠と、航空隊からの視点に分け紹介している。



陸軍八日市飛行場航空分廠



陸軍八日市飛行場航空隊



陸軍八日市飛行場全体

「八日市飛行場 ―飛行場があった街―

大正4年(1915年)、八日市に日本初の民間飛行場が建設され、その後陸軍の飛行場となり、戦争中は、多くの部隊が戦地へと向かった。戦争末期には、飛行場に対して空

襲がたびたびあり、飛行場の周りで暮らす人たちは、空襲におびえる日々を過ごさなければならなかった。飛行場とともに発展してきた八日市に残る記憶をたどる。



「学徒勤労動員 ー勉強よりも増産ー」

労働力の不足を補うために、生徒も授業の合間に働き手として動員され、内湖干拓作業や、軍需工場などで働かなければならなかった。ここでは、八日市飛行場や内湖干拓での体験に焦点をあて、東近江近隣で行われていた学徒勤労動員について紹介する。



「滋賀県の空襲」

終戦間際になると滋賀県でも、軍事施設や軍需工場、駅などを中心に空襲の頻度が多くなっていった。八日市飛行場があった八日市や、軍事工場であった能登川を中心とする東近江地域でもたびたび空襲の被害に遭い、子どもを含む犠牲者が出た。記録に残るものと、人びとの記憶にだけ残っている空襲の体験に分けて、当時の出来事を明らかにする。



「戦時の暮らし」

物資の不足や防空訓練などで、日々の生活は戦争の影響を受け、変化していった。こうした戦争を支える地域や人びとは「銃後」とよばれ、その中心は女性たちだった。生

活の変化は大人だけではなく、学校生活や遊びに至るまでの子どもたちの暮らしにも現れるようになる。八日市の街ではどのような変化があり、どのような出来事があったのかを、大人と子どもの視点から考えてみる。



「八日市飛行場に関する情報提供コーナー」の設置

来館者の中で、八日市飛行場に関する体験や思い出をお持ちの方から、情報提供をしていただけるようにコーナーを設置。職員やボランティアとの会話で聞かせていただいた情報も含めて加えていくことで、地域の記録を一緒に残していける環境づくりを行った。



第4回企画展示 「語りつぐ記憶 ー戦時を生きた人びとの体験ー」



第4回企画展示

会期：平成25年（2013年）1月5日～6月23日

会場：滋賀県平和祈念館企画展示スペース

関連展示：「除隊記念品」「出征について」

開催趣旨と概要

本企画展示は体験談に焦点をあて、戦争を体験された地域の人びとの記憶を紹介する。現代に生きる自分との接点を見つけやすい環境づくりを目指して、滋賀県内の旧50市町村より1名ずつ選び、戦地、銃後、大人、子どもなど、身近な地域に住む人びとの体験から、それぞれの想いや願いに触れ、平和へのねがいを現在へと語りつぐきっかけを目指す。



第4回企画展示チラシ表面



第4回企画展示チラシ裏面

展示構成

「地域に残る体験」

人びとの「記憶」から、戦時を生きた人びとの想いにふれ、ゆっくりと身近な地域の

人びとの「記憶」にふれることで、体験者それぞれの思いや願いを利用者一人ひとりが感じられるよう「湖南」「湖東」「湖西」「湖北」の4地域に分け、より利用者が自分との距離を短く感じられるような環境をつくった。



「記憶を伝える」

それぞれの「記憶」を現代に伝えるための滋賀県平和祈念館の取り組みや、戦争体験者の語り部活動について紹介し、戦争体験を語りつぐための新たな行動が生まれることを目指す。



関連展示

企画展示の体験談で出征に関する話題が多かったため、現在ではなくなってしまった制度である「出征について」と、兵役を終え、無事に帰宅することができたという挨拶

代わりに進呈されていた「除隊記念品」についてをテーマとし、收藏展示スペースにおいて収集資料を紹介した。



(2) 特別企画展示

第1回特別企画展示 「群像」



第1回特別企画展示

会期：平成24年（2012年）3月17日～平成25年（2013年）3月30日

会場：滋賀県平和祈念館エントランス

開催趣旨

本特別企画展示「群像」は、滋賀県平和祈念館基本理念のひとつである「モノと記憶の継承」から、戦時を生きた人びとの写真を展示した。戦争中はすべての人びとが時代に翻弄されつつも、戦後70年近い年月が経過し、戦後生まれが多くを占めるようになってきた中、これまで収集してきた戦争体験とそれらにまつわる当時の資料を通して、戦争体験者それぞれの思いや平和への願いを次世代へと伝えていく施設を目指すというメッセージが込められている。

(3) 地域交流展示

第1回地域交流展示 「群像」



会期：平成24年（2012年）3月17日～
5月27日
会場：滋賀県平和祈念館地域交流室

第1回地域交流展示

開催趣旨

本地域交流展示「群像」は、エントランスで展示した第1回特別企画展示と連動して開催したものである。特別企画展示と同じく「モノと記憶の継承」をテーマとし、収集資料の中から、平時・戦時に関わらず集合写真を選び、写真展を開催した。

第2回地域交流展示 「八日市の大凧」



会期：平成24年（2012年）5月30日～
7月16日
会場：滋賀県平和祈念館地域交流室

ボランティア大凧グループによるミニ大凧作成作業

開催趣旨

滋賀県平和祈念館の立地する東近江市八日市地区には、江戸時代より男の子の誕生を祝って、5月の節句に凧を上げる文化がある。それに関連して、現在でも東近江大凧祭が開催され、大凧づくりボランティアグループがミニ大凧を作成し、出品をした。そこで、ボランティアの活動紹介とともに、八日市の大凧文化について紹介した。

第3回地域交流展示 「八日市飛行場 ー戦前・そして戦後ー」



会期：平成24年（2012年）9月28日～
11月4日

会場：滋賀県平和祈念館地域交流室

第3回地域交流展示ポスター

開催趣旨

第3回企画展示「八日市飛行場 ー飛行場があった街ー」に関連させ、八日市飛行場を中心とした地域での出来事を、戦前は「翦風号を甦らせる会」、戦後は「東近江市南部地区まちづくり協議会」のこれまでの活動成果を通して紹介した。



第4回地域交流展示 「平和学習成果展」

会期：平成25年（2013年）2月20日～5月下旬

会場：滋賀県平和祈念館地域交流室

開催趣旨

県内の小学生が平和祈念館を活用して戦争や平和について学習し、その成果をまとめた作品を展示した。また、平成25年（2013年）3月7日には、地元愛東北小学校6年生の児童による学習発表会を開催した。県内小学校17校の児童の作品を展示した。



(4) 他館との交流展示

平成 24 年度平和祈念展示資料館・滋賀県平和祈念館「平和祈念交流展」

開催趣旨

「兵士」「戦後強制抑留者」「海外からの引揚者」等のテーマを扱う関係館と連携し、双方の館が所有する資料等を有効活用しながら、多様な形態でより効果的に関係者の労苦を語り継ぐ展示会等を実施し、相乗効果を高める。

○滋賀県平和祈念館における展開

名 称 : 平和祈念交流展

「シベリア強制抑留いろはかるた—斎藤邦雄の世界—」

会 場 : 滋賀県平和祈念館 地域交流室

開催期間 : 平成 24 年 (2012 年) 11 月 7 日～11 月 25 日

対 象 : 開催期間に平和学習で来館する小学生・中学生をメインに
若年層からシニア層

展示構成 : ①平和祈念展示資料館の活動紹介

バナーや映像を使用して、平和祈念展示資料館の存在をアピールし、認知拡大に繋げる。

②資料展示

戦後強制抑留者の労苦に関連するイラストのパネルと複製資料を展示し、関係者の労苦についての理解促進を図る。

事業主体 : 共催 滋賀県平和祈念館・平和祈念展示資料館 (総務省委託)



○平和祈念展示資料館における展開

名 称 : 平和祈念交流展

滋賀県平和祈念館×平和祈念展示資料館

会 場 : 平和祈念展示資料館 特設展示コーナー2・3

(東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 48 階)

開催期間 : 平成 24 年 (2012 年) 9 月 19 日～12 月 25 日

対 象 : 若年層からシニア層

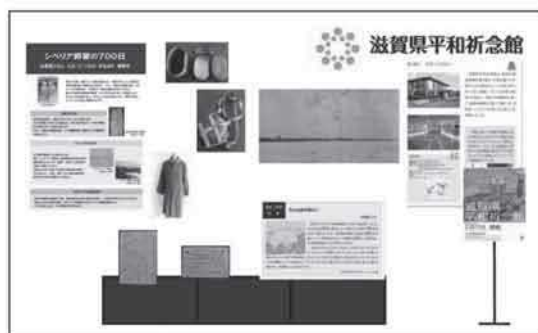
展示構成 : ①滋賀県平和祈念館の活動紹介

開館ポスターおよび活動紹介のパネルを展示して、滋賀県平和祈念館の存在をアピールし、認知拡大に繋げる。

②資料展示

滋賀県在住の戦後強制抑留者および海外からの引揚者の体験者資料をパネル展示し、関係者の労苦についての理解促進を図る。

事業主体 : 共催 平和祈念展示資料館 (総務省委託)・滋賀県平和祈念館



(5) その他の展示

語りつぐ、ふるさと滋賀の風景



会期：平成24年（2012年）7月20日～

会場：滋賀県平和祈念館 2階 ロビー

「語りつぐ、ふるさと滋賀の風景」チラシ

開催趣旨

滋賀県は、美しい琵琶湖、そのまわりに広がる田園、これらを取りまく山々、その中に点在するまちや集落など、自然と人々の生活とが一体となって、湖国の風景が形づくられてきた。本展示では、昭和の初めの県内各地の写真を「水辺」、「街並み」、「里山」の3つの視点から展示を行い、現在の風景と比べてみて、身近な地域の出来事を知るきっかけづくりを目指した。

平和を願う子どもピースメッセージコンクール作品展示

会期：平成24年（2012年）11月1日～12月2日

会場：滋賀県平和祈念館 2階 ギャラリー

開催趣旨

次世代を担う子どもたちが、戦争と平和をテーマにした絵を描くことにより、戦争の悲惨さや平和の尊さを考えるきっかけとするとともに、子どもたちが描く絵画を通して、広く県民に平和への思いを伝えることを目的として実施した。県内の小学校5年生から中学生を対象に作品を募集したところ、13市町20校から383点の作品応募があり、すべての応募作品を展示した。

